16　　困った色好み 　文法　敬語②　二方面への敬語

光源氏は、養女として迎えたの人柄をしきりに褒め称える。妻のは、これまでの彼の色好みな振る舞いを思い出し、苦言を呈している。

ただにしもすまじき御心ざまを見知り給へれば、思しよりて、「ものの心得つべくはものしⓐ給ふめるを、㋐うらなくしも打ち解け、①頼み聞こえ給ふらむこそ心苦しけれ」とのたまへば、「など頼もしげなくやはあるべき」とⓑ聞こえⓒ給へば、「いでや。我にても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心ざまの、思ひ出でらるる節々なくやは」と②微笑みてⓓ聞こえ給へば、あなと思ひて、「③うたても思しよるかな。いと見知らずしもあらじ」とてわづらはしければ、㋑のたまひさして、心の中に、人のかう推しはかり給ふにも、いかがはあべからむと思し乱れ、かつはひがひがしうけしからぬ我が心のほども、思ひ知られ給うけり。

語注

ただにしも思すまじき御心ざま＝光源氏の色好みな振る舞いを言う。

あな心疾と思ひて＝ああ、察しのよいことだと光源氏は思って。

いかがはあべからむと思し乱れ＝「どのようにすればよいのだろうかと光源氏は玉鬘の今後について思い悩みなさり」の意。

【原文】

ただにしもすまじき御心ざまを見知り給へれば、思しよりて、「ものの心得つべくはものし給ふめるを、うらなくしも打ち解け、頼み聞こえ給ふらむこそ心苦しけれ」とのたまへば、「など頼もしげなくやはあるべき」と聞こえ給へば、「いでや。我にても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心ざまの、思ひ出でらるる節々なくやは」と微笑みて聞こえ給へば、あなと思ひて、「うたても思しよるかな。いと見知らずしもあらじ」とてわづらはしければ、のたまひさして、心の中に、人のかう推しはかり給ふにも、いかがはあべからむと思し乱れ、かつはひがひがしうけしからぬ我が心のほども、思ひ知られ給うけり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

紫上は、光源氏の色好みを思い出して〔　　　　〕ながら思いを述べ、光源氏は早々に話を切り上げる。光源氏は、玉鬘の処遇に思い悩む一方で、自らの〔　　　　　　　〕心の内を悟る。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（終止形でよい。）〈4点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓓの敬語について、敬意の対象を選べ。〈1点×4〉

ア　光源氏　　イ　紫上　　ウ　玉鬘

ⓐ〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕　ⓒ〔　　　〕　ⓓ〔　　　〕

問四　チェック問題　敬語②　二方面への敬語など

次の傍線部は誰から誰への敬語であるかを答えよ。〈1点×4〉

1　宮の御前に、ののア奉りイ給へりけるを、…（枕草子）

2　皇子のたまはく、「命を捨てて、かの玉の枝持ちて来たる、とて、かぐや姫に見せウたてまつりエ給へ」と言へば、持ちて入りたり。（竹取物語）

ア〔　　　　　〕から〔　　　　　〕　イ〔　　　　　〕から〔　　　　　〕

ウ〔　　　　　〕から〔　　　　　〕　エ〔　　　　　〕から〔　　　　　〕

問五　傍線部①について、

⑴　現代語訳せよ。〈5点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

⑵　紫上がこのように述べる理由として最も適当なものを選べ。〈8点〉

ア　光源氏の色好みをうまく利用し、巧みに取り入り養女として生活する玉鬘に対して、軽蔑の念を抱いたから。

イ　光源氏の色好みな心情に気づきながら、嫌な気持ちにならず、ひたすら彼のことを信じる玉鬘を哀れに思ったから。

ウ　妻である自分の気持ちも考えず、光源氏の愛情を素直に受け入れる玉鬘の遠慮の無さに、不満を覚えたから。

エ　玉鬘に対する光源氏の好意に気づき、非難するとともに、彼を信頼しきっている玉鬘に同情したから。

〔　　　〕

問六　傍線部②に込められた紫上の心情を一つ選べ。〈5点〉

ア　卑下　　イ　絶望感　　ウ　皮肉　　エ　満足感

〔　　　〕

問七　傍線部③とあるが、光源氏は紫上がどのようなことを推察したと言っているのか。二十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　本文の内容に合致するものを一つ選べ。〈6点〉

ア　紫上は、光源氏を頼りがいのある人間と評価している。

イ　光源氏は、紫上から受けたい仕打ちを思い出している。

ウ　紫上は、光源氏の邪推を厄介なものだと感じている。

エ　光源氏は、自らの感心できない心のさまを自覚している。

〔　　　〕

【解答】

問一　微笑み　けしからぬ

問二　㋐＝隔て心がない　㋑＝おっしゃりかけてやめる〈4点×2〉

問三　ⓐ＝ウ　ⓑ＝イ　ⓒ＝ア　ⓓ＝ア〈1点×4〉

問四　ア＝作者　から　宮〈1点×4〉

イ＝作者　から　内の大臣

ウ＝皇子　から　かぐや姫

エ＝皇子　から　翁

問五　⑴　頼り申し上げなさっているだろうことが気の毒だ。〈5点〉

⑵　エ〈8点〉

問六　ウ〈5点〉

問七　自分が玉鬘に恋心を抱いているということ。（20字）〈10点〉

問八　エ〈6点〉

【現代語訳】

普通にはお思いでないだろう（光源氏の）ご性格を（紫上は）見知っていらっしゃるので、思い当たりなさって、「（玉鬘は）分別はおありでいらっしゃるようなのに、すっかり隔て心がなく打ち解けて、（あなたのことを）頼り申し上げなさっているだろうことが気の毒だ」と（紫上が）おっしゃるので、「どうして頼りないようであろうか、いや頼りがいはあるはずだ」と（光源氏は紫上に）申し上げなさると、「さあ（どうでしょうか）。私にしてみても、同じく耐えがたく、思い悩んだ時のあった（あなたの）お心が、自然と思い出される節々がないことがあろうか、いや思い出すばかりだ」と微笑んで（紫上は光源氏に）申し上げなさるので、ああ察しのよいことよと（光源氏は）思って、「嫌なことをもお気づきになることよ。（玉鬘は）あまりわからないことはないだろう」と思って厄介なので、おっしゃりかけてやめて、心の中で、人〔＝紫上〕がこのようにご推察なさることにつけても、（玉鬘の処遇は）どうしたらよいだろうかと思い乱れなさり、また一方では非常識な感心できない自らの心の程も、自然とおわかりになるのであった。

【補充問題】

問１　「など頼もしげなくやはあるべき」（２～３行目）を現代語訳せよ。

問２　「思ひ出でらるる節々」（４行目）とあるが、紫上はどのようなことを連想しているのか。最も適当なものを選べ。

ア　光源氏がかつて様々な女性と恋仲であったこと。

イ　光源氏が現在玉鬘とただならぬ関係にあること。

ウ　玉鬘の母がかつて光源氏と恋仲にあったこと。

エ　玉鬘の結婚相手がなかなか決まらないこと。

【補充問題解答】

問１　どうして頼りないようであろうか、いや頼りがいはあるはずだよ。

問２　ア